紙版 ハコブネ×ブックス vol 46

https://hakobune.wp-x.jp

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・ＹＡ作品を未来に語り継ぐ web サイトです。

特集 これは君の物語

僕（ぼく）を甲、君（きみ）を乙として両者の関係を捉えてみましょう。タイトルからは、主体として行動するのは甲であり、乙はその恩恵を受けるかのように思えます。ところが、物語の主人公は乙です。乙は悩んでいます。家族との不和や学校で居場所がないことに純粋で繊細な感受性は傷つき、生きづらさを感じています。相談できる人はおらず、孤軍奮闘しながら、誰にも気づかれないように装っています。そこに乙とは次元の違う複雑な問題を抱えた甲が登場します。難病や奇病、あるいはファンタジーやＳＦ系の世界の人です。甲は乙に暖かいまなざしを向けていますが、自分のことで精一杯な乙はそれに気づきません。このもどかしさが身上であり、読書の愉悦ですが、より文芸的に進化するスターツ出版作品は、パターンだけでは語れない深淵を覗かせます。健全な倫理観に裏打ちされた、児童文学よりも生真面目なケータイ小説の進行形に注目ください。

明日死ぬ僕と 100 年後の君

review

作　者　夏木エル
出版社　スターツ出版
発　行　2019 年 8 月
ISBN　978-4813707400

高校二年生の女子、生（いくる）が心を傷めているのは、母と祖母とが言い争い、互いを傷つけ合う姿に直面しているからです。看護師として働き、家族の生計を支える母と、家のことを取り仕切る祖母。互いに歩み寄れない二人の間で、認知症の高齢の曽祖母の介護を手伝う、いくるは、自分が長く生きることに失望しています。将来に希望が持てず、適当に書いた進路希望者を担任に叱責された、いくるは、ボランティア部への参加を命じられます。ボランティア部の聖人と呼ばれる同学年の男子、夕星（ゆうせい）が、奉仕活動に専心する姿に複雑な気持ちを抱いたものの、彼には一日しか寿命がなく、奉仕した人から報酬として一日分の寿命を奪わざるを得ない事情を知ります。人は何のために生きているのか。いくるは人との対話を通じて、その考えを深めていきます。

僕は花の色を知らないけれど、君の色は知っている。

review

作　者　ユニモン
出版社　スターツ出版
発　行　2023 年 6 月
ISBN　978-4813792482

高校二年生の女子、彩葉（いろは）が心を傷めているのは、お昼休みに一緒にお弁当を食べる子たちと話を合わせることが辛くなってきたからです。彼女たちが、何気なく人を馬鹿する軽口に傷ついてしまうのは、中学生時代、クラスで無視され、不登校になった頃の気持ちをまだ抱えているからです。学校に足が向かず公園を訪れた彩葉は、花畑で写真を撮る同じ高校の同学年の男子、陽大（ようだい）と出会います。その灰色の瞳をした少年に、学校に行きたくないという気持ちを漏らしてしまった彩葉。脳の病気のために色覚障がいを発症し、色を判別できずモノクロの写真を撮り続ける陽大に、言葉で色を説明するという役割を得た彩葉は、自分の灰色の世界にも色を取り戻します。陽大の病気が進行する中、彩葉はスピーチコンテストに挑み、これまでの自分を越えていきます。

僕は何度でも、きみに初めての恋をする

review

作　者　沖田円
出版社　スターツ出版
発　行　2015 年 12 月
ISBN　978-4813700432

高校一年生の女子、星（セイ）が、心を傷めているのは、両親の不仲が深刻になっているからです。離婚も目前の状態で、セイは家にいることが辛く、学校帰りに町をあてもなく歩きまわり時間をつぶしていました。噴水のある静かな公園で、一人、空を見上げて佇んでいたところ、セイにカメラを向けてシャッターを切る少年が現れます。気軽に話しかけてくるフレンドリーな少年、ハナは、綺麗なものを覚えていたいから写真を撮っているのだと話します。ハナと親しくなったセイは、事故で負った脳の損傷による記憶障がいのために、ハナが一日しか記憶が保てない状態であることを知ります。写真と日記で翌日に記憶を繋いでいるハナ。症状は次第に悪化し、忘れたことさえ忘れていくハナを、家族の問題を乗り越えたセイは、覚悟をもって見守っていきます。

僕は君と、本の世界で恋をした。

review

作　者　水沢理乃
出版社　スターツ出版
発　行　2019 年 6 月
ISBN　978-4813707028

大学一年生の女子、文乃（あやの）が心を傷めているのは、文学部に通いながらも、母親から医学部受験のための仮面浪人を強いられているからです。とっくに医学部受験を諦めているのに、母親の手前、受験勉強をするフリをしている文乃。大学生活を自由に楽しむこともできない彼女にとって、大学の図書館だけが唯一、心の落ち着く場所でした。おすすめコーナーに置かれた一冊の小説『僕は君と、本の世界で恋をした。』を読み感激したところを、文乃はその本の著者だと名乗る少年、優人（まなと）に声をかけられます。実体験を描いたその本に登場するヒロインは、すでに亡くなっているという話に驚き、彼の失意を思い、物語の舞台になった本に関わる場所を一緒に巡ることになった文乃。優人と行動することで、文学部に通い続けたいという想いを母親に告げる勇気を育てていくことになります。

特集
これは君の物語

僕がタイトルにいないと、君が誰なのか判然としませんが、想像の幅は広がります。難病も奇病も登場せず、ファンタジーでもＳＦ系でもない、日常の問題を日常のスケールで解決する新しい物語もあります。良識に疎外されない、真のウエルビーイングがここにも求められはじめています。

きみと真夜中をぬけて（雨）
スターツ出版 1969 年

紙版「ハコブネ×ブックス」vol.46
2024 年 7 月 1 日発行　●発行人 きむらともお

事務系会社員。趣味で児童文学紹介サイト ハコブネ×ブックス（非営利）を運営しています。日本児童文学者協会第 6 回児童文学評論新人賞佳作他,諸々を受賞。

旧 Twitter 連携しています。
@tomoostretch